

森鷗外の『蛇』論

呉俊永*

(e-mail : ohjuyo@hanmail.net)

目次

- 一、はじめに
 - 二、作品世界における蛇の意義
 - 三、「嘉言善行」あるいは「偽善」
 - 四、偏向的で乱暴な男性主義言説
 - 五、おわりに
-
-

一、はじめに

森鷗外の『蛇』は明治四十四年一月に『中央公論』に発表された短編小説である。この作品は理学博士の「己」が長野県に出張した際に、県庁の幹旋で豪家の穂積家に泊りながら、そこで見聞きした家の暗い歴史を語るという仕組みになっている。『蛇』に関する論は他の作品に比べてそれほど多くはないが、これまでの論者の主眼点は次の四つの側面に注がれてきたと言える。第一に、作品の主調をなしている幻想性に注目し、幻怪小説として読もうとする傾向である。その代表的なものに「鷗外が、妖しい状況設定と、主体者不明の「音声」に執し、そこから「不安」を偏在させようとしたのは、『蛇』を幻怪小説として書く企画を持っていたからにほかならぬ」とする山崎國紀の論がある¹⁾。第二に、『半日』と同系列の作品に位置づけ、鷗外の自家用小説と見るものである。岸田美子は創作動機を「或人の如く『迷信打破』に置かず、母並に同胞に対して、鷗外が妻に抱いてゐる心境を示して慰め、打つだけでなく、且角立てずに道理を説き、同時に母

* 空軍士官学校 助教授、日本近代文学

1) 山崎國紀「鷗外『蛇』の考察—二つの視点」『立命館文学』第540号、1995年7月

への無限の同情を寄せてゐる」ところに求めている²⁾。

第三に、近代日本社会の過度期的状況に対する文明批判小説として捉えるものである。竹盛天雄は「作者は一家庭の紛糾を素材的に扱いながら、近代日本社会の過度的状況における混迷に文明批判的照明をあてようところみたと考えられる」という見解を述べており³⁾、瀧本和成は「新しい女」お豊に日本の旧道徳、古い因習のうちにある偽善性を批判させると同時に、旧世代の批判者としての新女性のもつ人間性の欠如を御隠居さんとの対蹠のなかで描いたとした上で「人間的な優しさ、人間性という立場から四十年代の封建主義、近代主義に批判を加えた」と結論づけている⁴⁾。最後に、蛇で象徴される混沌とした時代状況を描いた作品と見るものである。大屋幸世は、この作品に描かれた混沌とした状況が以後鷗外の「生活上の虚無感を深くにじませた作品、あるいは反倫理的な世界や権威の問題を取り扱った作品」に引き継がれて行くと言及し、その外縁の広がりを想定している⁵⁾。

ところで、この作品には穂積家の主要人物でありながら「己」に家の実像を語りかけ、問題解決に臨んでいる清吉という奉公人が登場する。これまでの論考では穂積家の悲劇の原因を姑と嫁との葛藤ないし主人の「薄志弱行」な性格に求めようとする傾向が強かったためか、清吉という人物の役割についてはあまり注目していない。「科学者の態度と処置に大いに感心したが、それよりもっと心を惹かれたのは清吉という老人であった。今度改めて読んでみて、その迫力にもう一度感激した」⁶⁾とする坂西志保の論と「作者鷗外の温かいまなざしは、実直で信心深い、いわば堅固な清吉爺さんの上にそそがれているのであって、当代の若主人夫婦の上にはない」⁷⁾とする竹盛天雄の論を除けば、清吉に焦点を当てたものはほとんど見当たらない。しかしながらそのいずれも、この物語が清吉の語る話によって展開されているという事実を見逃している。清吉の話には曖昧さと不透明さが残されており、時には矛盾した言動まで露呈しているにもかかわらず、清吉によって語られる話を丸呑みしているのだ。

本稿では、清吉の言葉違いや東京からの里帰りの真の理由や蛇を処置する際の矛盾した言動などを具体的に検討しながら、清吉という名前とは裏腹に彼の内部に潜んでいる偽善性に照明を当てることによって、この作品を理解する手がかりを探りたい。同時に、お豊を取り巻く男たちの男性主義的な言説に注意を払いながら『蛇』の豊かな作品世界を読み直し、作者鷗外の創作意図に迫りたい。

2) 岸田美子「『蛇』と『半日』」『森鷗外全集』至文堂、1950年

3) 竹盛天雄「鷗外その紋様・その16『蛇』について—『寂しき人々』を補助線として(三)—」『国文学』第25巻14号、学灯社、1980年11月

4) 瀧本和成「森鷗外「蛇」論—〈新しい女〉をめぐる—」『立命館文学』第515号、1990年3月

5) 大屋幸世「鷗外「蛇」を読む—〈混沌〉の世界—」『国文鶴見』第18号、1983年12月

6) 坂西志保「鷗外を読みはじめた頃」『森鷗外全集』第一巻(月報一)、筑摩書房、1959年

7) 竹盛天雄、前掲論文

二、作品世界における蛇の意義

この作品は信州の由緒のある豪家に泊り合わせた理学博士「己」が夜中に絶えず聞こえてくる女の異様な声に驚き、奉公人の清吉爺さんに仔細を尋ねるところから始まる。絶えず聞こえてくる女のただならぬ声に気を取られて、「己」は「もしや狂人ではあるまいか」とも想像したりする。以後、主体者不明の声は嫁のお豊のことで、彼女が精神に異常をきたすまでの経緯が清吉と主人の穂積千足の話によって明らかにされていくのだが、清吉の話によれば、お豊は亡くなった姑の仏壇にとぐろを巻いている青大将を見つけてから気が狂ってしまったという。穂積家は「県で三軒と云われた豪家の一つ」であり、亡くなった先代の主人は多額納税者で貴族院議員の候補にまでのぼった人物である。言ってみれば、お豊は何一つ不足のない家に嫁いできたわけであり、しかも周囲から千足とお豊は良縁だと噂されるほど、幸せな結婚になるはずであった。なのに、いま彼女はたかが一匹の蛇によって不幸の境遇に陥ったのだ。

一体、お豊の気を狂わせた蛇は作品世界でどんな意味をもつのか。それを探る前に、まず冒頭部の場面描写の中に何気なく登場する、というより鴉外の巧みな筆によって場面描写とオーバーラップしながら登場する蛇の形象を見ておこう。

座布団の傍に蚊遣の土器が置いてあって、青い烟が器に穿ってある穴から、絶えず立ち昇って、風のない縁側で渦巻いて、身のまわりを繞っているのに、蚊がうるさく顔へ来る。

きょうは道が好かったに、小庭の苔はまだ濡れている。

爺さんに連れて来られた黄昏に、大きな蝦蟇が一疋いつまでも動かずに、おりおり口をぱくりと開けて、己の厭がる蚊を食っていたのを思い出して、手水鉢の向うを見たが、もうそこにはなんにもいなかった。

「青い烟」「穴から」「立ち昇って」「渦巻いて」といった言葉は、単なる蚊遣りの烟の形容に留まらず、住み処の穴から立ち昇ってとぐろを巻いている青大将のことも表わしている。また「濡れている」「苔」は青大将の皮膚の形象であり、庭の片隅にいるはずの「大きな蝦蟇」がいきなり姿を消したのは、すでに青大将が穂積家の中に入っていることを象徴的に語っているのだ。冒頭部の場面性に注目したこれまでの論考を見ると、「己」を取り巻く混沌さを読み取ろうとしたもの⁸⁾、この作品を幻怪小説に仕立てるための意図的な描写として捉えたもの⁹⁾がある。二つの論文で捉えているように、主体者不明の声と「ぼ

8) 大屋幸世、前掲論文

9) 山崎國紀、前掲論文

んぼん」と鳴る時計の音は、読者に不気味な感じを与え、かつ不安を掻き立てる効果を演じている。また「そうぞうしい」「うるさい」などの不快感を与える言葉と、「せせこましい」「いろいろ」「ぼんやり」などの視点の定まらない言葉による曖昧さは人間の感覚器官に「整然としない不快感」をもたらしている。これらの要素が〈混沌〉とした作品世界の前触れとして機能していることは確かであるが、しかしながら、二つの論考とも作者鷗外の言葉遊びは見逃しているのだ。こうした作者の創作態度はこの作品の創作意図と密接な関わりをもつと思われるのだが、このことに関しては後述することにする。

では、蛇は作品世界の中でどんな意味をもつのか。作品の題目も蛇であり、書き出しのところに蛇の登場が象徴的に書き込まれているという事実からは、作者鷗外が蛇にただならぬ意味を託しているとみて差し支えなからう。しかし、それが明らかにされないまま物語は展開されていく。その意味が明らかになるのは結末に近いあたりであって、その間蛇は依然として謎のような存在として残されている。遊び的な要素を加味した推理小説とでも言うべきところなのだが、それはともかく実物の蛇が登場する部分を見てみよう。

奥さんが線香を上げに、仏壇を覗かれますと、大きな蛇のとぐろを巻いていましたのが、鎌首を上げて、じっと奥さんのお顔を見たそうでございます。

昨日奥さんの御病気になられたのでからが、御隠居様を疎々しくなされた罰だなんぞと囁き合っているらしい。

迷信とか申すものかと存じますので、誠に恥じ入ります次第でございますが、(後略)

以上の引用からすると、蛇は亡くなった姑の御隠居さんの死の化身として周囲の者たちに認識されていることが分かる。引用文に「迷信」とあるように、死者が蛇の形で蘇るといった話は日本に昔から伝えられてきた「迷信」の一つである。井本英一は『日本書紀』に収録されている蛇に関わる内容を取り上げ、「人間は死後、蛇になるという信仰があったと思われる。ことに非業の死を遂げた者が化した蛇は、復讐すると信じられていたらしい」との見解を述べている¹⁰⁾。前田淳は近世の代表作『伽婢子』の中に収録されている「蛇、癩の中より出づ」という小品を例に挙げ、恨みを抱いて死んだ女が蛇となり、その恨みを晴らすというところに蛇の迷信が認識されていたことを明らかにしている。その上で「千足の母が死んで初七日の晩、母を疎んじたお豊さんの目前に蛇が出現し、それ故、お豊さんは発狂する。その蛇の現われた場所は、仏壇の中であった。お豊さんには、恨みを抱いて死んだ姑が、不気味な意図をもって、まがまがしい動物に姿を変え、死後再び目前に立ち現われたように見えたのである」と、この作品における蛇の意義を捉えている¹¹⁾。お豊が蛇を見

10) 井本英一「蛇の話」『大阪外国語大学論集』第1号、1990年1月

11) 前田淳「『蛇』小論」『宮崎女子短期大学紀要』第18号、1992年3月

て気が狂ってしまったという事実からすれば、やはり彼女は蛇を亡くなった姑との関係の中で捉え、姑の怨霊として受け止めていたとみるのが妥当であろう。

さて、安部公房の「へびのことも……常識について」という文の中には「説明しつくせない対象が、しかも強制的に反応を強要するものとして現れた場合、常識反射系に混乱とこわばりが生じ」という文章が見当たる¹²⁾。この文章はこの作品とは関係ないが、お豊の発狂に至るまでの精神的な反応のメカニズムを知る上で参考になろうと思い、あえて引いてみた。安部公房式に解釈すれば、何の必然性もないのにいきなり自分の前に立ちはだかる蛇はまさに「説明しつくせない」存在であり、しかもその存在が強制的に迷信を強要したために常識神経系に混乱が生じ、気が狂ってしまったということになろう。新知識で武装した近代的な考えの持ち主であるかのように見えるお豊であっても、迷信という前近代的な思考体系に支配されずにはいられないのだが、ここで注目したいのは、蛇がお豊の別の断面を浮かび上がらせる装置として機能しているという点である。

このことはお豊に限らない。お豊の夫で、亡くなった御隠居さんの息子の千足にも、そして清吉爺さんにも同様である。千足は「己」に自分を「薄志弱行」で「極まった人生観が無い」人間として紹介しているが、彼は清吉が蛇のことで相談に来た時に「あんなきたないものをいじらなくとも事だ、いつか逃げてしまうだろう」と言って取り合わなかったし、「迷信とか申すものか」と言って一蹴してしまう。これといった明確な人生観をもたず、何事にも「どうでも好い」というふうには煮え切らない生き方をしている千足なのだが、不意の出来事の前での思考判断は冴えており、科学的で冷静な一面さえ呈するのである。一方清吉は、お豊が仏壇の蛇を見て卒倒した時は姑を疎々しくした罰だなどの噂が拡がるのを恐れて「なんでもこんな事を下々に聞かせてはならない」と思い、仏間に人の出入りを禁止させたと言っている。しかし「己」をその現場に案内した際の場面を見ると、

「(前略)何も不思議な事はないのです。兎に角この蛇はわたしが貰って行こう。」
爺さんは目を丸くした。「さようなら、若い者を呼びまして。」
「いや。若い者なんぞに二度とは見せないという、お前さんの主意は至極好い。蛇位はわたしだって掴まえる。(後略)」

とある。一見、何の変哲もないやり取りのように見えるが、実は自分の予想とは違った「己」の出方に慌てた清吉が自らの矛盾を露呈してしまうのである。いま「己」は清吉の「主意」すなわち、悪い噂の広がりを防ぐために「下々」の者に蛇のことを知らせまいとした考えを褒めている。が、その褒め言葉が返って清吉を相対化しているのである。清吉は千足によって「実直」「献身的」「信心深い」人物として「己」に紹介されており、奉公人としての役目を充実に果たしてきた人物として描かれているので、これまでの研究では批判の対

12) 安部公房「へびのことも……常識について」『砂漠の思想』講談社、1965年

象から排除されていた。しかし、読者に伝えられる彼の誠実な相貌のほとんどが彼の口から語られているという事実を見逃してはならない。「己」の「蛇位はわたしだって掴まえる」という言葉といい、いとも簡単に蛇を始末する態度といい、そこには一種のシニカルな視線が含まれていはいないか。

以上で見てきたように、蛇はお豊の発狂という穂積家の悲劇の直接の原因を提供した主体として機能するとともに、お豊をはじめ登場人物たちの隠された一面をえぐり出すための装置として機能するのである。作品世界における蛇の占める意義はまさにこの点にある。ここで一つ付け加えたいのは、『蛇』の作品世界が二枚舌のように作り上げられているという点である。例えば、登場人物たちは千足、お豊、清吉といった名前とは相反する相貌を呈しており、千足と清吉は「和気日融々」と書いてある襖を通して作品世界に登場するが、その向こう側には文字とは裏腹な暗鬱にして悲惨な生活があるといった具合である。こうした事実を考え合わせると、蛇のもつ意義はもっと明確になろう。

三、「嘉言善行」あるいは「偽善」

この作品に登場する人物は穂積家の主人である千足とその妻お豊、奉公人の清吉、そして穂積家に泊りかけた「己」、以上の四人である。物語は女の妖しい声を聞いてまさか狂人ではあるまいかと思った「己」がその事情を清吉に尋ね、二人のやりとりを隣の部屋でそれとなく盗み聞きしていた千足が代わって応酬するという形で展開されていく。

まず、「己」は寢床を用意しておいた旨を告げに来た清吉に妖しい声の正体についての話を請う。清吉はこの家は宿屋と違ってみんなが早く眠りにつくのだが、どうせ今夜は通夜をするのだから時間が割けると言う。「通夜」という言葉に興味をそそられた「己」はもっと詳しい話を求める。清吉は「主人の母親が亡くなりましてから、明日で二七日になりますのでございます」と答え、そして「己」の問うままに答えに応じるのである。彼の口を通して明かされる第一の話は千足の両親のことである。

千足の父は「多額納税者」で、「貴族院議員」になるところであったが、病気を申し立てて早く隠居してしまった。父は地元出身である佐久間象山を崇拝して彼の随筆集『省讐録』を死ぬまで傍に置いていたという。無学の清吉が「なんとかいう、歌を四角な字ばかりで書いてある本」と説明する、この書物は明治四年に刊行されたもので、中には漢文五十七条を含め古今詩、和歌などが収録されている。この書物での象山の主張は、儒教を基とした東洋の道德思想と西洋の科学技術を修得せねばならぬという、いわゆる和魂洋才の思想である¹³⁾。そして彼は仏教の教えを重んじ、「四恩」すなわち天地・国王・

13) 瀧本和成、前掲論文

父母・衆生の恩を常に強調したと言う。こうした思想や生き方が穂積家の一員である妻の御隠居さん、息子の千足の考え方や生き方などに影響を及ぼしていたわけである。母の御隠居さんは「実に優しい女で、夫の言うことに何一つ負いたことがな」かったし、清吉をはじめ「下々のものをいたわって使ってくれた」女性である。また毎日十人の乞食に二十五銭ずつ施し、食事の時には何か「嘉言善行」を話すことを常としている。二人は江戸から明治にかけての儒教的な倫理観と勧善懲悪的な考えの持ち主であり、その考えを実生活の中に実践した人物と言えよう。

次に明かされるのは千足のことである。「好い子だと評判せられていた」彼は、大きくなるに連れて少し弱々しい青年になった。学校の成績が良かっただけに、父の遺志に従って母は「是非学士にする」つもりで世話をしていた。ところで、中学に入る頃から体が悪くなり、少し無理をして勉強すると眩暈がして卒倒したりする。それでも中学は相応に卒業したが、東京へ出て、高等学校の試験を受けることになってから、度々落第して、次第に神経質になっていく。それを心配した親戚たちの勧めで早稲田に入学させたが、「それから諦めて余り勉強をしな」くなる。そのうち日清戦争のある年に、早稲田を卒業して故郷に帰った。千足も一人前の男になったと思った清吉は、家の経営のことについて相談をしかけようとするが、「清吉、お前に任せるから、これまで通りに遣ってくれ」と真剣には受け止めない。そこで清吉が「そんなら何か熱心に行っている事があるかと思って、気を付けて見ても、分らない」のである。東京の方で何があったのか具体的な記述はないが、千足は生きる意欲を喪失した張り合いのない青年になってしまったのである。

旺盛な生活欲をもって働くべき年頃であるにもかかわらず、なにごとにも興味をもたず無感動な心理状態に陥った千足は、漱石の『それから』の主人公代助が「三十になるか、ならないのに既に *nil admirari* の域に達してしまった」のと軌を一にする。このような千足に対して清吉は「御隠居には優しくして、一家の事は自分に任せているので、至極結構な御主人ではあるが、どうも張合のないような気がして来た」と言う。この観察はまさに大学を卒業しても定職につかず、家からの経済的援助によって暮している代助と同様、いわゆる「高等遊民」を思い浮かばせる。もちろん「高等遊民」という言葉が流行ったのは明治四十年代のことで、千足の卒業した時期が明治二十八年ないしは二十九年あたりであることを勘案すれば、彼を「高等遊民」として位置づけるのにはやや無理が生じるかも知れない。しかしながら、少なくとも千足を「高等遊民」の先駆的な存在として見ることには差し支えないだろう。あるいはこの作品の書かれたのが明治四十四年だから、千足を造型するに当たって鴉外が当時の社会風潮を念頭においていたと見ることも可能であろう。

それはともかく、以上のような千足の生活ぶりは彼の結婚にまで及ぶ。同じ土地の旧家で育ち、東京に出て高等女学校を卒業して帰ったお豊との結婚を母から勧められた時も「どうでも好い」と答える。お豊は「いつか越後の人がこの娘を見て、自分の国は女の美しい国だが、お豊さんのように美しいのは、見たことがないと云った」ほどの別嬪であり、しかも東

京に遊学して高等教育まで受けた女性なのである。母は「遠慮深い口から」そう言うのであって、実は「喜んで迎える気になっているのだ」と思い、ことをすぐに運ばせたのである。

このような経緯でお豊は穂積家に籍を移したわけだが、悲劇はお豊が嫁に来た時から始まる。穂積家は父の生きていた時分から食事の時に「嘉言善行」を交わすことを常としていた。

これは穂積家に限ってある事で、食事の時は何か近郷であった嘉言善行というような事を話すことになっている。先代の主人のした流儀が残っているのである。丁度新聞紙の三面記事の反面のような話である。もしこれという出来事がないと、誰でも前日あたりに本か何かで読んだとか、人に聞いたとかいう話をする。そのために人の話を聞くにでも、本を読むにでも、食事の時の話の種子になるような事柄に耳を留めて聞く、目を留めて見るということになっているのである。

地方の有力な人士であり、仏教で唱える四恩を忘れないようにと家の者に教えていた先代の主人のことからすれば、以上のような仕来たりは何の不思議もない。いや、むしろ微笑ましい食卓の風景と言ったほうが適切であろう。ところで、問題は穂積家の一員になったお豊の態度である。「美しい嫁を取ったのが嬉しいと見えて、御隠居が楽しげに」話をしても、お豊は「ろくに物も食べずに、誰よりも先きに黙って席を立てて」しまう。同じことが昼も晩も続き、「次の日からは、用事にかこつけて、嫁さんは遅れて食べに来る」のである。妻の態度を不審に思っていた千足がそのわけを聞くと、「どうもお母様のお話が嫌いでならない」と答える。千足の思っている通り、いくら「嘉言善行」といっても人によっては面白くない場合があるだろう。しかし、だからといって別に聞くに堪えないことでもなかろう。そこで千足がなぜかと突き詰めると、「あんな偽善の話は厭だ」と言い切る。お豊の口からこの言葉が洩れた瞬間から母は口数が少なくなり、遠慮勝ちになって、やがて穂積家は「沈黙の家」になった。

お豊は一体どんな考えでこの挑発的な発言をしたのであろうか。お豊は現在気が狂ってしまった状態にあるので、彼女の口から直接語られるものはないが、次のような千足の言葉に注目してみよう。

妻の考えでは人間に真の善人というものは無い。もし有るとしても、広い国に一人あるとか、千百年の間に一人出るとかいうもので、実際付き合っている人の中には、そんなものの有りようがない。善い事をしたり言ったりするというのは、ためにする所があるので、自分を利するのである。卑劣である。それに反して、悪い事は誰もしたい。しかしそれを吹聴するには及ばないから、黙っている方が好い。よしまた言うにしても、悪い事の方なら、正直に言うのであるから、偽善でもなければ、卑劣でもないと言うのです。

この千足の発言によれば、お豊は荀子の唱える「性悪説」を信奉しているようである。

「性悪説」というのは、本来人間のもっている感性的な欲望に注目し、それを放っておけば社会的な混乱が生じかねないから「悪」と規定したものであって、主旨は修養をもって人間の内部に潜在しているそれを抑え、道徳的な完成を目指すところにある。ところが、お豊は「悪い事」をした人を啓蒙するような具体的な代案はもっておらず、ただ「悪い事」をしたことを正直に打ち明けるのだから結構なことだというふうは無理に押し通すだけだ。

それでも「善い事をしたり言ったりするのは、ためにする所があるので、自分を利するのである」とする彼女の言葉にもう少し注意を払う必要がある。「赤ん坊は生まれながらの *égoïste* ですからね」という「己」の言葉にしみじみと表われているように、人間というのは究極的には自己のために生きる存在ではないか。社会秩序を維持するために道徳という観念を作り出し、そこに善という価値を付与したからこそ、人は人間としての本性を抑えつつ生きようとするのではないか。こうしたお豊の人間観察は間違っているとは言えない。ただ彼女の主張を封建的な思考体系の中で受け止めようとするが故に、あたかも間違っているように見えるだけである。このような封建的な道徳観念や思考体系を否定するお豊の発言は、山崎國紀の表現を借りて言えば、「江戸期から明治にかけての儒教的あるいは勧善懲悪的な考え方に対する新しい措定である」に違ひなからう¹⁴⁾。

それにしても、お豊が姑の「嘉言善行」に対して「善い事をしたり言ったりするのは、ためにする所があるので、自分を利するのである」と言ったのは、依然として気にかかる。姑の偽善を察するような言動が具体的に示されていない限り、お豊の主張は理論の領域を越えないと言わざるを得ない。だとすれば、高等教育を受けた結果として頭だけが発達したのだと見るべきなのか。このあたりが『蛇』を読み解く上で一番難解な部分であるが、実は、鴎外は人間の奥底に潜んでいる偽善というモチーフを姑の代わりに清吉という人物を通して描いたのである。姑をすでに亡くなった過去の人物として設定することで、「自分を利する」ような具体的な行跡を伏せるしかなかった鴎外は、姑と同じ系列の人物清吉を偽善の実行者として選んだのである。

穂積家の悲劇を内部の問題に限定して見る場合、清吉はその悲劇に直接関わりをもっていない人物と言える。これまでの研究でこの人物にあまり注意を払わなかった所以であるが、しかし「己」という外部の人間からすれば、清吉もまたこの悲劇の内部に位置する存在である。しかも穂積家の悲劇の顛末がこの人物によって語られている以上は、彼にもう少し注意する必要があるだろう。

まず書き出しのところを見ると、「己」が清吉の言葉が土地の訛りでないことにすぐ気づく場面がある。

「そうさね。まだ寐られそうにないよ。お前詞が土地の人と違うじゃないか。」

14) 山崎國紀、前掲論文

「へえ。若い時東京に奉公をいたしておりましたから、いくらか違いますのでございませう」と云って、禿げた頭を掻いている。

先ほどまで「恐ろしく早言」で「聞き取れない」女のわめき声から、「にいと云う」土地の訛りを「はっきりと」聞き分けていた「己」が布置されたのは、単に彼の泊まっている場所が信州であることを示すためではない。作者の真の意図は土地の訛りでない清吉の言葉を反照するところにあるのである。清吉は若い頃東京に奉公に出たことがあって、それから言葉が変わったのだと言うが、彼が奉公に出た期間というのは「小学校というものが始めて出来た頃」から「千足が中学校に這入ったばかり」の時までである。具体的にいえば、三十歳くらいに出郷してから、約八年間を東京で暮したということになる。

さて、果たしてその間に生まれ故郷の言葉が変わるものだろうか。また三十代後半から現在の六十才に至るまでの長い期間を献身的に穂積家に奉仕してきた清吉であれば、未だに地元の言葉が変わっていないことはどう受け入れるべきなのか。おそらく「己」に意表を突かれたためであろう、頭を掻く姿からは何か後ろめたさを感じられなくもない。清吉の言葉の違いは一種の謎として提示されるのだが、このことによって清吉という名前とは裏腹に曖昧さが読者に晒されるようになる。

清吉の不確かさは彼の言動にも表われる。彼は明治十四、五年頃に六十五才で亡くなった先代の主人が「多額納税者で、貴族院議員になるところであった」と「己」に言っているが、貴族院の設置を定めている大日本帝国憲法が明治二十二年に公布されたという歴史的な事実を踏まえれば、この発言は嘘か記憶の間違いになる。以上のような清吉の姿と前で見えた仏壇の蛇を処置する際の彼の矛盾な行動を合わせると、やはり彼には不審なところがあると言わざるを得ない。

清吉は先代の主人が亡くなった時、自分の将来を放棄して東京から穂積家に帰ったと言っている。

いつか古参になった自分は、女房を持たせて、暖簾を分けて貰うことになっていると、先代の穂積の主人が卒中して、六十五歳で頓死した。(中略) 自分は取るものも取りあえず、この土地へ帰って来た。御隠居は五十を越しているのに、今の主人はやっと長野の中学校に這入ったばかりである。それからというのは、穂積家一切の事を引き受けて、とうとう一生独身で暮したのである。

この清吉の言葉によると、主人の頓死は「死に身になって稼い」でようやく手に入れた明るい未来を奪ってしまった、彼にとってはまさに悲劇と言えよう。そうした清吉への同情もある程度働いたであろう、この部分は彼が「実直」で「献身的」で「信心深い」人物として評価されるようになった決定的な箇所となっている。しかし、これが清吉本人の口から出た言葉であり、しかも清吉を語る〈語り〉がある指向性をもって限りの、そうした表面的な事実と

清吉の内面の動機が一致するかどうかは定かではない。実際この部分からは、自分の未来を犠牲にしたことに対する一種のヒロイズムが感じられなくもない。

結末のところで「己」がさりげなく言った「動物は習慣に支配せられ易いもので、一度止まった処にはまた止まる。外へ棄てても、元の栖家に帰る」という言葉は、この場面の伏線として機能する。そもそも動物の回帰属性というのは、安全な場所あるいは利益をもたらす場所を求めるべく本能に起因する性質であって、清吉の犠牲というのも究極には利己的な行為に過ぎない。そこで、お豊の「ためにする所があるので、自分を利する」という言葉がこの作品内で占める比重は非常に大きい。「並の奉公人ではない」と自他共に認める清吉であればこそ、その言葉のもつ意味はもっと増幅される。

四、偏向的で乱暴な男性主義言説

穂積家の「生活の基礎」は封建的な道德観念や思考体系の中で築き上げられたものである。それに反旗をひるがえした自分の妻お豊を千足はどのように受け止めているのか。

その男がこう云う事を言ったのです。妻を持って子供が沢山出来た。ところが、その妻が authority というものを一切認めぬ奴で、言う事を少しも聞かない。それでは親に済むまいとか、お上に済むまいとか、神様に済むまいとか、仏に済むまいとか、天帝に済むまいとか云おうとしても、どれもこの女に掴まえさせる力草にはならない。どうも今の女学校を出た女は、皆無政府主義者や社会主義者を見たような思想を持っているようだ、そう云うのです。その時はわたくしもこの男は随分思い切った事を云うと思って聞いていましたが、よく考えて見ると、わたくしの妻などもオオソリチイは認めません。事によると、今の女はまるで動物のように、生存競争のためには、あらゆるものと戦うようになっているのではないのでしょうか。一体どうしてこんな風になって来たのでしょうか。

これは去年、学生の頃に心安くした友人から聞いた話を「己」に聴かせてくれる場面である。千足はこれまでの日本社会になかった風潮が昨今「新しい教育」を受けた女性たちによって現れていることが理解しかねない。そこで嘆くかのように「己」にその答えを求めるのだが、「己」は「打遣って置けば、そうなるのです。赤ん坊は生まれながらの égoïste ですからね」と言う。「己」もまた「性悪説」に基づいた人間観をもっている人物と言えるが、この場面で注意されるのは、高等教育を受けた現今の女性は自己のためにあらゆるものと戦うエゴイストであるがゆえに、社会秩序の維持に欠かせない権威をまで否定するのだという男たちの考え方である。彼らは高等教育を受けた女性が無政府主義者や社会主義者的な傾向をもっていると認識しているが、明治四十四年に起った大逆事件だけを置いてみても、これはあまりにも男性中心的な言説であると言わざるを得ない。

このような言説は以降も千足と「己」の対話を通して続くのだが、その内容は二つに大別される。一つは、男女の差違を理性の発達加減に求めるものであり、もう一つは平等思想の否定である。まず、女はなぜ男と違うのかという千足の問いに、「己」は次のように答える。

それはなんと云っても、男の方は理性が勝っているのでしょう。君はさっき人生観を持っていないと云われたが、持っていないと云っても、社会に立っての利害関係は知っている。利己主義ばかりで推して行けば、自分の立場がなくなるとことは知っている。Dogmaは承認しない。勿れ勿れの教えには服せない。しかし利害の打算上から、むちゃな事はしない。女だって理性の勝っている女は同じ事でしょう。ただそんな女は少ないのです。

この発言からすると、女性に利己主義者が多いのは男性より「理性」が発達していないためである。ところで「己」の言う理性とは何かと云えば、「人間は利害関係だけでも本当に分かっていれば、むちゃな事は出来ない」とあるように、「利害関係」を弁えるということなのである。そもそも理性とは、感情に走らず、道理に基づいて考えたり判断したりする能力を指す。「己」の捉える「利害の打算」とは一つの処世術というべきもので、理性を説明する上ではなんら論理的な繋がりや理論的な根拠をもたない。大屋幸世の指摘通り、これはまさに「あつけにとられるような」主張ではないか¹⁵⁾。

それでも千足は「なるほどそうです」と首肯のだから、いかにも「極まった人生観が無い」し、「生活の基礎になるような思想」を備えていない人物であるかが窺える。ただし「赤ん坊は赤い物に目を刺激せられれば、火をでも攫む。それと同じように、女は我慾を張り通して、自分が破滅するのですね」と付け加えるところを見ると、自分の妻が穂積家の仕来たりを理性をもって理解しようとせず、感情的に対応した結果として発狂したのだと考えているようである。

今の千足の話に対して「己」は次のように言う。

まあ、そんな物でしょう。だから、赤ん坊を泣かせて、火を攫ませないようにする。赤ん坊を大人と一しょには扱わない。無政府主義者でも、社会主義者でも、下の下までの人間を理性のある人間と同一に扱おうとしているから間違っているのです。一般選挙権の問題でからがそうです。多数政治なんというものも、将来これに代るべき、何等かの好い方法が立てば、棄てられてしまうかも知れません。詰まり *égalité* (仏語で平等という意味—筆者注) という思想が根本から間違っているのですね。女だって遠くが見えないために、自分の破滅を招くような事をすれば、暴力で留めなくてはならないでしょう。

以上の二つの引用文からは「己」の主義が明確になる。女性は男性より理性に欠けているので「むちゃな事」をする。まるで「赤ん坊」と同じだ。「赤ん坊」(=女性)を「大

15) 大屋幸世、前掲論文

人」(=男性)といっしょに扱ってはならない。「赤ん坊」(=女性)が「むちゃな事」をすれば、「暴力」という非常手段を使ってでも引き留めるべきだ。これが「己」の主義で、男女差別と女性に対する暴力の肯定という、極めて偏向的で乱暴な男性中心の言説であるのだ。これまで見てきたように、お豊を取り巻く男たちは穂積家の悲劇、すなわち御隠居の寂しい死やお豊の発狂の原因をひたすら彼女に求めていることが分かるのだが、同時に男たちの乱暴で偏狭な男性優位思考が赤裸々に露呈されていることも見逃してはならない。

作中の男たちは偏狭な男性優位思考に囚われているだけに、お豊のようないわゆる「新しい女」に警戒の念を隠さない。が、作者鴎外が彼女を平塚らいてうの言説に象徴されるような「新しい女」として描いていないことは、「己」の口を借りて「Bernard Shaw」に触れている点からも推察できる。瀧本和成によれば、鴎外は旧制度や旧道徳の批判者としての女主人公ヴィヴィイを描いた、バーナード・ショウの戯曲『ウォーレン夫人の職業』(明治四十二年版)を読んでいるが、この作家の名前を打ち出したのは単なる偶然ではあるまい。やはり鴎外は「新しい女」ヴィヴィイを意識していたと見るのが妥当であろう。しかしながら、瀧本の見解通り「鴎外は、ショウが描いたヴィヴィイのように偽善的習慣や旧道徳を打ち破るために社会との闘いを貫いていくような女性としてはお豊を描かず、むしろ敗者として描いているのである¹⁶⁾。

だとすれば、作者鴎外は日本という社会を支えてきた封建的な価値に優位を置くためにこの作品を書いたのか。それにしても、この作品は封建主義と近代主義の対立というあまりにも単純な図式になりかねない。そこで鴎外がこの作品を執筆する前に在東京津和野小学校同窓会で講演した内容を補助線として使って創作意図を探ってみたい。

唯混沌が混沌でいつまでも変化がなく活動がなくては困りますが、その混沌たる物が差し当たり混沌としているところに大変に味がある。どうせ幾ら混沌とした物でも、それが動く段になると刀も出れば槍も出れば何でも出て来る。孰れ動く時には何かしら出て来る。けれども其土台は混沌として居る。余り綺麗さっぱり、きちんとなっているものは、動く時に小さい用には立つが、大きい用には立たない。(中略)

今の時代では何事にも、Authority と云うようなものがなくなった。古い物を糊張にして維持しようと思っても駄目である。Authority を無理に弁護しておっても駄目である。或る物は崩れて行く。それならば崩れて行って世がめちゃめちゃになってしまうかと云うと、そうでは無い。人は混沌たる中にあらゆる物を持っているのでありますから、世の中に新思想だとか新説だとか云うものが出て来て活動して来ても、どんな新しい説でも人間の知識から出たものである限は、我々もその萌芽を持っていないと云うことは無いのです。

諸君は混沌という事をどう見ます。めちゃめちゃになると云う事ではない。又混沌が何時までも混沌に安んじていられるものでも無い。部屋の中でも其処等がごたごたに散らかっていれば、誰でも整理しなければならぬ。整理は厭でもします。整理はするけれども混沌たるものは永く存在する。綺麗さっぱりと整理せられる筈のものではない。思想とか主義とか何と

16) 瀧本和成、前掲論文

か云うものが固まるのは物事を一方に整理したのである。17)

この演説に表われている鷗外の主義は次のようにまとめられよう。つまり、今は社会秩序の根幹を成す「Authority」を認めない時代となった。それゆえ世の中が混沌たる状態に置かれているかのように見え、やがて「めちゃめちゃになってしまう」とのおそれの声も高まっている。が、決してそうではない。「Authority」というのは時代の趨勢に従って変わるものである。人はそれを不変の真理と思うからこそ、社会秩序が崩れて行くだろうと懸念しているのだ。世の中は「あらゆる物」から成り立っている。あらゆる物の中には古いものもあれば、新しいものもある。混沌というのは新しいものが出現する際に生じるため、当分は古いものと新しいものが「ごたごたに散らかって」いるだろう。それで人は世の中が混沌としていると思うようになる。しかしこの状態は自然の治癒過程と同じくおのずと整理されるのだから、あえて整理しなくても済む。それでも人はあせり、無理をしてでも整理しようとする。そして「綺麗さっぱりと」整理されたと思うが、実は、それは真の整理ではない。「思想とか主義とか云う」偏った物差しで截断した結果に過ぎない。エネルギーは原子同士が衝突する際に発生する。無理に一方の原子を片付けてしまえば、原子同士の衝突はなくなるため、エネルギーは最初から期待できぬ。それに反して両方の原子を放っておけば、衝突も起りエネルギーも生じる。そしてそのエネルギーが尽きれば平穏な状態になる。この一連の過程の繰り返し、とりまおさず自然の摂理である。世の中もこの原子の働きの原理と同じである。焦ることはない。ただ余裕をもって観照するだけで充分なのだ。これが鷗外の主義なのである。

鷗外のこうした余裕と観照の態度は、冒頭部の描写に表われている遊び的な要素と相俟って『蛇』の創作に多大な影響を及ぼしていると思われる。穂積家に代表される既存社会の権威を認めようとしないお豊は、確かに穂積家にとっては秩序の破壊者と言える。そこで千足や清吉は家の崩壊をおそれ、お豊を無政府主義者や社会主義者にまで追い込みながら事態の収拾に努めるのだが、作者の視線は男たちの独断的で男性主義的な言動にも隈無く注がれている。登場人物から距離を置いて彼らがどう動くのかを観照する態度と言えよう。漱石が「あとは人間が勝手に泳いで、自ら波瀾が出るだらうと思ふ、さうかうしてゐるうちに読者も作者も此空気にかぶれて是等の人間を知る様になる事と信ずる」18)という確信のもとで『三四郎』の主人公三四郎を東京という新しい空間に放り出したのと全く同じ態度と言える。

もちろん、この作品には「新しい女」の問題も含まれており、封建主義と近代主義の対立という深刻な時代認識の問題も含まれている。しかしながら、鷗外はこれらの問題のある「思想とか主義」をもって解決しようとはしなかった。結末のところで夢遊病者のような「歩き付き」をし、「ぼんやり立っている」千足の姿は何も解決されなかったことを象徴的に物

17) 「混沌」明治42年1月17日、在東京津和野小学校同窓会第九回例会の席上における講演

18) 「『三四郎』予告」東京朝日新聞、明治41年8月19日

語っている。鴟外はただ、あらゆる新旧の思想が対立していて、あたかも混沌としているかのように見える現今の日本社会を一方に偏らない目線でじっと見つめながら、その内部に蓄えられているポテンシャル・エネルギーの顕現を待っていたと言えよう。

五、おわりに

この作品は短編であるので、その分量は多くない。が、その中には作者鴟外の該博な知識が哲学問題、宗教問題、社会問題など多方面に渡って披露されている。例えば、道徳・倫理という名の下に隠蔽されている人間のエゴイズムを暴こうとしたお豊の姿からは人間存在の本質に迫ろうとする作者の姿勢が窺える。「耶蘇教」を浅はかないものとし、仏教の「四恩」を主張する先代の主人の姿や蛇にまつわる「迷信」に右往左往する姿からは宗教に関わる作者の認識が垣間見られる。また無政府主義者や社会主義者や普通選挙権などの用語が男たちの口から頻繁に発せられ、当時の政治や社会問題に対する知識人たちの関心も伝えられる。

しかし、鴟外の主眼は以上のような問題の穿鑿に置かれていない。これらの問題を抱え込みながら生きて行くしかない存在としての人間、その中でもかくあるべき人間の姿ではなく、かくある現実の人間の姿をありのまま描くところに置かれているのである。その意味で、『蛇』は穂積家における姑と嫁の不和の問題を描いた作品でもなければ、社会秩序を揺るがす存在としての「新しい女」の問題を取り上げた作品でもない。時代の流れに伴っておのずと出てくるあらゆる問題に人間はどう反応しどう動くのか、生動感にあふれる人間模様を描いた作品である。その際、鴟外の筆はあらゆる問題のある「思想とか主義」をもって整理しようせず、混沌とした状態で披露している。「余り綺麗さっぱり、きちんとなっているものは、動く時に小さい用には立つが、大きい用には立たない」からだ。混沌を恐れず、余裕と観照の態度で社会を見つめることのできた鴟外作家的資質が『蛇』をもっと豊かな作品に作り上げたのである。

【参考文献】

- ・ 安部公房 「へびのことでも…―常識について」 『砂漠の思想』 講談社、1965年
- ・ 井本英一 「蛇の話」 『大阪外国語大学論集』 第1号、1990年1月
- ・ 大屋幸世 「鷗外「蛇」を読む - 〈混沌〉の世界 -」 『国文鶴見』 第18号、1983年12月
- ・ 景山直治 「蛇」 『鷗外文学入門』 古川書店、1980年
- ・ 岸田美子 「『蛇』と『半日』」 『森鷗外全集』 至文堂、1950年
- ・ 坂西志保 「鷗外を読みはじめた頃」 『森鷗外全集』 第一巻月報一、筑摩書房、1959年
- ・ 須永朝彦 「森鷗外」 『日本幻想文学集成』 国書刊行会、1993年
- ・ 瀧本和成 「森鷗外「蛇」論 - 〈新しい女〉をめぐる -」 『立命館文学』 第515号、1990年3月。のち『森鷗外 現代小説の世界』 和泉書院、1995年所収
- ・ 竹盛天雄 「鷗外その文様・その16『蛇』について - 『寂しき人々』を補助線として(三)-」 『国文学』 第25巻14号、学灯社、1980年11月
- ・ 田中美 「先導者としての森鷗外覚え書 - 「蛇」のころ、あるいは「妄想」まで -」 『国文学論考』 第20号、1984年3月
- ・ 前田淳 「『蛇』小論」 『宮崎女子短期大学紀要』 第18号、1992年3月
- ・ 山崎國紀 「鷗外『蛇』の考察 - 二つの視点」 『立命館文学』 第540号、1995年7月

要 旨

本稿は、森鷗外の短編小説『蛇』を読み直そうと試みたものである。これまでの先行研究では幻怪小説、鷗外の自家用小説、日本社会の過度期的状況に対する文明批判小説、混沌とした時代状況を描いた小説などと多様な評価が下されていたが、そのいずれも清吉という登場人物にはあまり注意していない。そこで視座を変えて、清吉に注意しながら読めば別の断面が浮かび上がるだろうと考えたからである。

こうした目的の下で、まず冒頭部に描かれている蛇の形象が作品世界の中でどのような意義をもつのかを探ってみた。次に、清吉の言葉違いや東京からの里帰りの真の理由や蛇を処置する際の矛盾した言動などについて具体的な検討を行なった。最後に、お豊を取り巻く男たちの男性主義的な言説に注意を払いながら、作者鷗外の創作意図に迫ろうと試みた。

以上のような考察の結果、蛇が登場人物たちの二重性や虚偽をえぐり出す装置として機能していることを確認し、お豊の発狂の原因が清吉の内部に潜んでいる偽善性に起因していることを明らかにした。そして穂積家の混沌とした状況が男たちの偏向的で乱暴な男性主義的言説によって作り上げられているという事実を確かめることができた。

以上の考察を通して、『蛇』は穂積家における姑と嫁の不和の問題を描いた作品でもなければ、社会秩序を揺るがす存在としての「新しい女」の問題を取り上げた作品でもない。時代の流れに伴っておのずと出てくるあらゆる問題に人間はどう反応しどう動くのか、生動感にあふれる人間模様を描いた作品であると結論づけた。と同時に、遊び的な要素、余裕と観照の姿勢で生き生きとした人間をありのまま観察しようとした作者の創作態度を確認することができた。

キーワード：蛇、道徳、偽善、混沌、新しい女、権威、余裕、観照

투 고 : 2008. 11. 30

1차 심사 : 2008. 12. 13

2차 심사 : 2008. 12. 27